

「してみせる」の意味・用法について

—「してみせる」の形をとる動詞の 語彙的な意味との関わりを中心に—

ソン ジヒョン

東京外国語大学博士後期課程/日本学術振興会特別研究員

要旨

「してみせる¹⁾」は「してみる」, 「しておく」とともに「もくろみ動詞²⁾」とされることもあるのだが, これらの動詞に関する研究では, 何のためにその動作をするかという目的性が特に注目されてきた。そのなかで「してみせる」は, 「手本」, 「みせびらかし」, 「強い意志」などの意味を表すものとされている(明星学園・国語部 1968, 鈴木 1969, 森田 1977, 高橋 1969, 笠松 1991)。しかし, 「してみせる」の意味について, また, それらの意味がどのような条件で実現されるかについては必ずしも明らかになっていないとは言えない。

本稿では, コーパスから採集した事例に基づき「してみせる」における語彙・文法的特徴を明らかにした。また, それを手がかりにして, 「してみせる」の意味・用法として①「動作の提示」(「表情や身振り・手振りの提示」, 「行為の提示」), ②「動作の具体化」, ③「結果の提示」, ④「話者の心理状態の提示」があることを示した。

1. はじめに

1.1. 「してみせる」の意味・用法

「してみせる」は, 「手本」, 「みせびらかし」, 「強い意志」を表すものとされている(明星学園・国語部 1968, 鈴木 1969, 高橋 1969, 笠松 1991)。次の例を見てみよう。

(1) 先生は英単語を正しく発音してみせた。

1 本稿では, 「Vてみせる」, すなわち, 動詞の中止形に動詞「みせる」がついているものを「してみせる」とし, 考察の対象とする。

2 「もくろみ動詞」とは, 「なにかもくろみをもっておこなう動作を表す動詞」のことで, 「もくろみ動詞」には, ためしにする動作を表す「してみる」, 手本やみせびらかしのためにする動作を表す「してみせる」, あとのことを考えにいれてする動作を表す「しておく」が挙げられている。(明星学園・国語部 1968: 80, 鈴木 1972: 398~399 参照)

(2) 花子は良子の前で指輪を振ってみせた。

(3) 今度は必ず勝ってみせる！

上の例(1)は、先生が正しい発音の手本として英単語を読み上げていることを表しており、その際の「してみせる」は「手本」の意味が読み取れる。例(2)は花子が指輪をした手をひらひらと振って見せ付けていることを表しており、その際の「してみせる」は「みせびらかし」の意味が読み取れる。また、例(3)は「勝つ」ことの実現に対する強い意志・決意・覚悟などを表す「強い意志」の例である。

しかし、「手本」、「みせびらかし」などの意味は、話が行われる場面や登場人物の間の人間関係を考慮した際に読み取れる意味であり、必ずしも「してみせる」の意味がそうであるとは断言できない。例えば、例(1)で日本語の先生がアメリカの留学生に英語を教えてもらっている場面を述べているものであると、その際の「してみせる」が「手本」の意味を表しているとはいい難い。そして、例(2)でも花子が良子に指輪を買ってもらったという事実関係があると、その際の「してみせる」に「みせびらかし」の意味は読み取りにくい。このように、「してみせる」の意味について、また、それらの意味がどのような条件で実現されるかについては必ずしも明らかになっているとは言えない。

1. 2. 先行研究の検討

「してみせる」の先行研究としては、明星学園・国語部(1968)、鈴木(1969)、高橋(1969)、森田(1977)、成田(1981)、笠松(1991)が挙げられる。先行研究における「してみせる」の意味・用法をまとめると〈表1〉のようになる。

表1: 先行研究における「してみせる」の意味・用法

	「してみせる」の意味・用法
明星学園・国語部 (1968)	手本のためやみせびらかしのためにする動作
鈴木重幸(1969)	①動作を手本としておこなったり、みせびらかすためにおこなったりすることをあらわす ②すぎさらずの形で話し手の強い意志をあらわす
高橋太郎(1969)	てほんやみせびらかしのためにする動作をあらわす動詞 (①見られることをかながえにいれてする動作をあらわす(デモンストレーション)、②人にほこりうるものとして動作を完成させることをあらわす(野心))
森田良行(1977)	①他者のために行為を提示することを表す ②他者の目を意識してわざと誇大に行為する ③使役の「せる／させる」を介して付く場合、相手に自発的に行為させるのだという強い意志を表す ④自己の行為に対する強い意志・覚悟・決意をも表す

笠松郁子 (1991)	動作のし手があい手になんらかの反応をもとめて意図的におこなう動作 (①信号としてはたらく動作, ②手本としてはたらく動作, ③みせものとしてはたらく動作, ④みせびらかしとしてはたらく動作, ⑤ (一人称の「してみせる」のすぎさらずの形で) 話し手があい手になんらかの反応をもとめて, 動作の実行への決意や動作の実現への自信をのべる)
成田徹男 (1981) ³	A: 特定の誰かに V ₁ ⁴ の動作そのものをみせる B: 不特定多数のあるいは全ての人に対して示す

「してみせる」の先行研究は、〈表 1〉の上部に挙げた五者のように、何のためにその動作を行ったかに重点をおいているものと、最後に挙げた成田 (1981) のように本動詞「見せる」と補助動詞「みせる」の意味素性の分析に重点をおいているものとに、2 つに分けられる。

前者の場合、「してみせる」を「もくろみ動詞」とし、何のためにその動作を行ったかに重点をおいており、「してみせる」の形をとる動詞が「意志動詞」であることを指摘している (明星学園・国語部 1968, 鈴木 1969, 高橋 1969, 森田 1977, 笠松 1991)。特に、笠松 (1991) は、「してみせる」の意味が実現される条件として文脈的条件を入れ、場面、人間関係について述べている (笠松 1991⁵)。

しかし、「意志動詞」であるという条件づけは、「してみせる」の形をとる動詞の規定として広すぎるため、「してみせる」の様々な意味とそれを実現する条件との関わりを捉えることは難しいと思われる。また、「してみせる」の意味が実現される条件について、文脈的条件に目を向ける前に語彙・文法的条件を明らかにする必要があると思われる。

後者の成田 (1981) は、「してみせる」の意味を A と B (A とは、特定の誰かに V₁ の動作そのものをみせるもの、B とは、不特定多数のあるいは全ての人に対して示すもの) に分けており、A の意味を表すためには、V₁ の動詞が「視覚で捉えられる具体動詞」でなければならないとしている。そして、B の意味を表すためには、具体的な動作を表さなくてもよいが、「何らかの形で結果が提示される」必要があることを述べ、「してみせる」を述語とする文の構文特徴に注目しながら、「してみせる」の形をとる動詞を新しい観点から述べている。

しかし、成田 (1981) では A の意味を表すための条件とされている「視覚で捉えられる具体動詞」にどのような動詞が入っており、また、B の意味を表すための条件とされる「何らか

3 成田 (1981) は、本動詞「見せる」と補助動詞「みせる」の連続性を意味素性の分析のなかで考察している。それぞれの意味素性をまとめると次のようになる。

本 動 詞	[+働きかけ]	—	[+指向性]	[+自制性]	[+継続性]	[+視覚性]	[+動詞]
補助動詞 A	—	[+実現性]	[+指向性]	[+自制性]	[+継続性]	[+視覚性]	[+動詞]
補助動詞 B	—	[+実現性]	—	[+自制性]	[+継続性]	—	[+動詞]

4 成田 (1981) は「て」を介して 2 つの動詞が続くことを「V₁ te V₂」としている。(p. 66 参照)

5 笠松は、「してみせる」に対して〈表 1〉に挙げた 5 つの意味を与え、それぞれの意味を実現させる条件として「話し合いの場面」、「教育の場面」、「観客のまえで演じる場面」、「ふたり、あるいはなんらかのひとびとの話し合いの場面」という場面や人間関係について述べている。

の形で結果が提示される」ことが何であるか、具体的に述べられていない。

1. 3. 研究方法

本稿では、「してみせる」が表す動作が何のために行うかという目的性および「してみせる」が文中でとっている語形に注目している研究（明星学園・国語部 1968, 鈴木 1969, 高橋 1969, 森田 1977, 笠松 1991）と「してみせる」の形をとる動詞の語彙的特徴および「してみせる」を述語とする文の構文的特徴に注目している研究（成田 1981）の両方を相補う方法で研究を進めていく。その際に、成田（1981）で本動詞「みせる」、および、補助動詞「みせる」が持つとされている意味素性のうち〔＋視覚性〕に注目し、「視覚性」と呼び、考察の1つの観点とする。

本稿で「視覚性（visibility）」とは、視覚で捉えられるか否かに関わる文法的な性質のことをいう。また、その動作が視覚で捉えられる動詞を「可視動詞」とし、捉えられない動詞を「非可視動詞」と呼ぶことにする。

「視覚性」は、台湾のツォウ語やヤミ語では冠詞、代名詞、指示代名詞などの区別に関わる文法要素である（『言語学大辞典』第6巻: 219 参照）。日本語の場合、台湾のツォウ語のように単語の区別に関わる文法要素ではないが、「してみせる」の意味の記述においては重要な性質の1つであると考えられる。例えば、「手を叩く」のように目で捉えることができる動作は、「手を叩いてみせる」ことで実際に「手を叩く」という動作を見せ、それを「手本」とすることもできるし、「みせびらかす」こともできる。しかし、「驚く」、「感心する」のように目で捉えられない動作は、その動作を相手に示すことさえ難しい。そのようなことを考えると、「してみせる」の意味・用法の考察において、「何のためにその動作を見せる」ものかを述べるためには、まず、「どのような動作を見せる」ものかの考察がまず必要であることは言うまでもない。

本稿では、コーパスから得られた実例に基づき、「してみせる」の形をとる動詞にどのようなものがあるかを調べ、そこに現れている動詞の語彙的特徴を明らかにする。また、「してみせる」が文中でとっている語形の形態的特徴、「してみせる」を述語とする文の構文的特徴を明らかにし、それらを手がかりにして「してみせる」の意味・用法を記述することにする。本稿でコーパスとして使用しているのは『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』の戦後 60 作品からの 423 例である⁶。

「してみせる」の形をとる動詞の語彙的特徴の考察にあたっては、動詞を連語⁷単位で取り挙げ、動詞が表す意味をより正確に捉えることにする。それは、本稿で考察の観点とする「視

6 本稿では、自然な現代日本語を反映した研究をめざし、『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』の 117 作品のうち、翻訳作品および 1950 年以前に出版された作品、そして、「新源氏物語」、「国盗り物語」、「剣客商売」のように古代語を現代語訳した作品は考察の対象から除いている。また、必要に応じては、web 上に公開されている諸文書を参考にした。検索は Google (<http://www.google.co.jp>) にて行った。

覚性」の判断を明確にするためである。例えば、「ひらく」の場合、「ドアをひらく」は「(ドアを)開ける」という意味の可視動詞であるが、「新しい道をひらく」は「新しい分野を開拓する」という意味の非可視動詞であり、視覚性の判断の結果は大きく異なる。

以下では、第2節で「してみせる」の形をとる動詞の語彙的特徴について、第3節で「してみせる」における形態・構文的特徴について、第4節で「してみせる」の意味・用法について述べることにする。

2. 「してみせる」の形をとる動詞の語彙的特徴

ここでは「してみせる」の形をとる動詞の語彙的な意味特徴について述べる。その際「してみせる」の形をとる動詞の意味のなかに「視覚性」が含まれているか否かに注目していく。「可視動詞」か「非可視動詞」かの判断に関して、「言う」のような言語活動を表す動詞は、電話で言ったり、口を動かさないまま声を出す腹話術で言ったりする場合も考えられ、その判断が難しい。しかし、そのような特殊な場合を除き言語活動を表す動詞が具体的な動作として視覚で捉えられる点に注目し、「可視動詞」とする。以下では、「してみせる」の形をとる動詞について、「可視動詞」(2.1.),「非可視動詞」(2.2.)の順に述べることにする。

2.1. 可視動詞

本稿で「可視動詞」とは、視覚で捉えられる動作を表す動詞のことをいう。以下では、「してみせる」の形をとる「可視動詞」を語彙的特徴でまとめることにする。具体的には、「具体的な作用動詞」(2.1.1.),「再帰的な表情・身振り動詞」(2.1.2.),「言語活動動詞」(2.1.3.),「表現活動動詞」(2.1.4.),「態度動詞」(2.1.5.),「表情・身振り動詞」(2.1.6.),「移動動詞」(2.1.7.),「姿勢変化動詞」(2.1.8.)の順に述べていく⁸。

2.1.1. 具体的な作用動詞

「具体的な作用動詞」とは、対象に働きかけて影響を及ぼす具体的な動作を捉える動詞のことをいう。例えば、次の例(4)の「(電報を)ひらく」は具体物である電報に働きかけてその形を変化させることを表している。例(5), (6)の「(カラビナに, ハーケンを)はめる」, 「(手帳を胸のポケットから)出す」は対象への着脱の行為を表している。例(7)の「(紙を)

7 「連語」に関して、奥田(1968~1972)の「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」を参考にする。奥田は、「連語」について「ふたつあるいはみっつの連語からなりたっているとはいえ、単語と同様に、名づけの単位であって、文をくみだてる材料としてあらわれる」(言語学研究会 1995: 6)とし、文の中で単語と単語の結びつき方を体系的に捉えている。

8 「可視動詞」と「非可視動詞」の比較を考慮に入れ、動作の対象を持つ動詞(2.1.1. から 2.1.4.)をさきに述べ、動作の対象を持たない動詞(2.1.6. から 2.1.8.)をその次に述べることにする。2.1.5. の「態度動詞」は、「身内を卑下する」のように対象を持つ場合もあるが、「いばる, きどる」のように対象を持たない場合もある。

たたく」は対象への接触動作を表している。例（8）の「（船を）作る」は生産物を作り出す動作を表している。

- （4）「父がとうとうだめらしいんです。いってきますわ。」志乃はわりに落ち着いた手つきで、たたんだ電報をひらいてみせた。私は、たちまち喉がからからになった。（忍ぶ川）
- （5）「たとえば、こんな道具にしても、正しい使い方はやはり指導者から教わった方がいい。独学は危険だ」藤沢はカラビナに、ハーケンを一本かちんとはめて見せた。「こんな道具まで使って……ロッククライミングはなんのためにやるんですか」（孤高の人）
- （6）「どうも早くからお邪魔します」と男は低く押えた声で言った。「江藤賢一郎さんですね。警察の者ですが……」そして黒い表紙の小さな手帳を胸のポケットから出して見せた。（青春の蹉跎）
- （7）「お化けだよ」「はあ？……」「お化けが山ンなかにいるんだよ」彼は指のさきで紙をたたいてみせた。（裸の王様）
- （8）「いや、そんな事はありません。私たちは絶対とは言えないまでも、極めて沈みにくい船を造ってみせます。それだけの可能性を考えて設計しているのですから」（山本五十六）

2.1.2. 再帰的な表情・身振り動詞

「再帰的な表情・身振り動詞」とは、働きかけの影響が動作主自身に向けられる動作のうち顔つきや仕種を捉える動詞のことをいう⁹。例えば、例（9）、（10）の「顔をしかめる」、「頭をさげる」のように身体部位に働きかけるもの、また、（11）の「しぶい顔をする」のように修飾語を伴う慣用的なものがここに入る。

- （9）私は、アジア大会の選手選考会が今日だったことを、ようやく思い出した。（省略）午後、会場の後楽園ホールに寄り、それからジムに來たのだろう。「どんなだった？」私が訊ねると、内藤は大袈裟に顔をしかめてみせた。（一瞬の夏）
- （10）藤本がカウンターの横からぼくに「よ・ろ・し・く」というような、変にブツギレのしぐさで頭を下げてみせた。藤本はぼくよりも二歳上で、おそろしいほど無口だった。

9 村木（1991: 25）は、「動詞の意味する運動が動作主体に向けられる」性質を「再帰性」とし、「再帰性」をもつ動詞を「再帰動詞」であるとしている。村木は、再帰性をつねにもつ「再帰動詞」として「浴びる」、「着る」、「（靴下を）はく」、「（肩を）すくめる」、「（まゆを）しかめる」を挙げている。その他に、「（自分の）手をたたく」、「（自分の）足を折る」、「腰を痛める」のような用法、また、「風邪をひく」、「下痢をする」のような病理・生理表現も挙げ、後者については、「対格の名詞をふくむが、慣用的で、他動性を欠いていて、再帰性の特徴とつながるものである」としている。本稿では、村木（1991）に倣って、「再帰」の意味を広く捉えることにする。

(新橋烏森口青春篇)

- (11) 師匠はいま虫の息で医者からも見放されている。そこへ、菩提寺の和尚の来訪だった。南窓は、皆にしぶい顔をしてみせた。(雁の寺)

2.1.3. 言語活動動詞

「言語活動動詞」とは、言葉を手段とする動作を捉える動詞であり、言語活動の内容を対象にとっている。例えば、例(12)、(13)の「言う」、「書く」は言葉を使った言語活動であり、「いやよ」という発言、「壽」という文字が言語活動の内容として現れている。

- (12) 「人間の性格などは、女を口説く時の口説き方を見れば分かる。(略)『おい、今夜俺と、どうだ?』といきなり持ちかければ、どんな不見転だって、一応、いやよぐらいのことは言ってみせるさ。(略)」(山本五十六)
- (13) 佐原定一のとにきた何でも手っとり早く処理をする書生が、「坊ちゃん、まず最初に、一番むずかしい字を教えてやろう」と言っ、彼の知っているなかで一番むずかしい字、「壽」という文字を書いてみせた。(楡家の人びと)

2.1.4. 表現活動動詞

「表現活動動詞」とは、芝居、曲芸、歌舞や体操などを行って見物人を楽しませること表す動詞のことをいう。「表現活動動詞」は、表現活動の内容を対象にとっている。例えば、例(14)、(15)の「(流行歌)を歌う」、「(猿踊り)を踊る」は歌舞を技として見せている。

- (14) 宮村健は歌が上手だった。山の歌もよく歌ったが流行歌をすぐ覚えて来て、加藤の下宿で歌ってみせた。(孤高の人)
- (15) 「よし、負けた!……仕方がない、負けてやるよ……」いわしの干物じゃあるまいし、こんな殺され方は、まっぴらだ。なにも本心から屈服したりしたわけじゃない。水を手に入れるためには、猿踊りだっておどって見せてやるさ。(砂の女)

2.1.5. 態度動詞

「態度動詞」とは、ある物事に面したときの人の様子を捉える動詞のことをいう。例えば、例(16)では栗の楽しみ方について述べる相手に、「僕、そんな単純なことしません」と偉そうに見栄を張る様子を表している。例(17)では猿の前で南京豆を食う恰好をし、おもしろがる様子を表している。この種の動詞には、他に「気取る、照れる、強がる」などがある。

- (16) 「あなた、栗の茹で方わかる?」山中良子は、太郎に尋ねた。「茹でたら半分に切って、スプーンで食べたら一番簡単よ」「僕、そんな単純なことしません」太郎は威張って見

せた。「僕、栗きんとんを作るか、さもなければ、栗ご飯を炊きます」(太郎物語・大学編)

- (17) 温泉宿で飼っている猿に向って、何も持っていないのに、南京豆を食う恰好をしてからかつてみせる。猿が飛びついて来て、さすがの山本も驚いて怯んだそうである。(山本五十六)

2.1.6. 表情・身振り動詞

「表情・身振り動詞」とは、感情や意思を顔つきや仕種を捉える自動詞のことをいう。例えば、例(18)の「笑う」は相手を安心させようとする気持ちを顔つきで表しており、例(19)の「肯く」は同感であることを仕種で表している。

- (18) 内藤は電車に乗り込み、「昨日のことは心配しないで、もう何でもないので」と言い、顔を皺だらけにして笑ってみせた。(一瞬の夏)

- (19) 「いや、大畑さんの新人事を聞いた時はね、僕も面食らいましたよ、正直言ってね。しかしよく考えてみると、大畑さんの言うことにも一理ある」「そうでしょうか?」「そうですね。大畑さんはこの道数十年のベテランですよ」と強く肯いて見せた。「でも、少しぼけてるんじゃないありません?」(女社長に乾杯!)

2.1.7. 移動動詞

「移動動詞」とは、ある場所から他の場所に移る動作を捉える動詞のことをいう。「移動動詞」は、例(20)のように方向性を持っているものもあれば、例(21)のように方向性を持っていないものもある。

- (20) 加藤の眼が光った。意地悪をするならしてみるがいい。おれは、雄山の頂上まで、きつと登ってみせる。彼は石垣のかげで、スキーを脱いで、アイゼンを履いた。(孤高の人)

- (21) その会社にはタイムカードも出勤簿もなく、なんとなく出社時間の頃に会社の中をうろついてみせるのが出社の証明ということになっていた。(新橋烏森口青春篇)

2.1.8. 姿勢変化動詞

「姿勢変化動詞」とは、体の構え方の変化を捉える動詞のことをいう。例えば、例(22)の「後向きになる」、例(23)の「逆立ちをする」は体の構え方の変化を表している。

- (22) 「どうでした。お怪我はありませんでしたか」と聞くと、「処置なしですわ。やられました」と云って、後向きになって見せた。背中 of 皮膚が両肩から下へすっかり剥けて、タブロイド判の新聞紙が濡れたようにだらりとぶらさがっている。(黒い雨)

- (23) こういう連中と一緒にになると、山本はこの上もなく楽しそうであった。敏子が「やめてエ。危ない」と叫ぶのを面白がって、利根川の川原をどんどん沖へ出て行き、切り立った岩の上で逆立ちをして見せる。(山本五十六)

2. 2. 非可視動詞

本稿で「非可視動詞」とは、視覚で捉えられない動作を表す動詞のことをいう。これらの動詞が表す動作は、本来は視覚で捉えることができないため、動作の実行の如何は動作を行う動作主にしか分らない¹⁰。

以下では、「してみせる」の形をとる非可視動詞を語彙の特徴でまとめることにする。具体的には、「抽象的な作用動詞」(2.2.1.)、「養育動詞」(2.2.2.)、「治療動詞」(2.2.3.)、「精神活動動詞」(2.2.4.)、「感情・心理動詞」(2.2.5.)、「成就動詞」(2.2.6.)、「社会的な状態変化動詞」(2.2.7.)、「生理的な状態変化動詞」(2.2.8.)の順に述べていく¹¹。

2. 2. 1. 抽象的な作用動詞

「抽象的な作用動詞」とは、動作主以外の対象に働きかけて影響を及ぼす抽象的な動作を捉える動詞のことをいう。例えば、次の例(24)の「道を拓く」は「特定の分野を開拓する」という意味であり、抽象的動作を捉えている。また、例(25)、(26)もそれぞれ「百年」という時間、「誓約」という事柄に働きかける抽象的な動作を表している。

- (24) 軒の深い妹背家の家の中でぼんやり暮していた加恵の目の前に、突然光彩を放つ一筋の道を於継は拓いて見せたのである。(華岡青洲の妻)
- (25) 「ぼくがですか。(省略)まあぼくが出馬してもふさわしい戦場であるですぞ。ぼくが司令官なら、百年をまず三十年に縮めてみせるね」(楡家の人びと)
- (26) 大丈夫、歐洲さまの御婚礼までには確かに間にあわせます、と彼は頼まれもしないのに、勢いこんでひさと歐洲のまえに誓約を立ててみせた。(楡家の人びと)

2. 2. 2. 養育動詞

「養育動詞」とは、有情物を育てることを表す動詞のことをいう。「養育動詞」は、人を含む有情物を対象にとっており、例(27)の「人をちゃんと働ける人間にまで育てる」のように「人を 結果状態に 育てる」という構造のなかに現れることが多い。例(28)の「～人間に

10 「勝つ」、「成功する」のように動作主が存在しないものもある。

11 「可視動詞」と「非可視動詞」の比較を考慮に入れ、動作の対象を持つ動詞(2.2.1から2.2.4)をさきに述べ、動作の対象を持たない動詞(2.2.6から2.2.8)をその次に述べることにする。2.2.5の「感情・心理動詞」は、「生活を案じる」のように対象を持つ場合もあるが、「苦しむ」のように対象を持たない場合もある。

する」のような構造をとっているものもここに入れる。

(27) あなた、どうか見ていて下さいね。私はきっときっと、清高をちゃんとよそ様のところで働ける人間にまで育てみせますから。(錦繡)

(28) いまはまだひと桁の足し算がやっとなのですが、私はきっと清高を、いつの日か、正常な人と同じくらいの人間にしてみせます。(錦繡)

2.2.3. 治療動詞

「治療動詞」とは、病気や病状を治癒または軽減させることを表す動詞のことをいう。「治療動詞」は、例(29)の「患者を癒す」のように人名詞が「を」格をとっている場合もあれば、例(30)の「乳癌を直す」のように病名を表す抽象名詞が「を」格をとっている場合もある。

(29) それなのに、いざ彼が新院長として、榆病院最高の権威として、患者を能うかぎり速やかに癒してみせて世間の評判をとり、衰退しかかった病院を復興させる使命をおびて診察室に坐ったとき、どうしたものかその信念はぐらついた。(榆家の人びと)

(30) 「通仙散を使いなさるんでございますかのし」「そうよ。僕はきっと乳癌を直してみせる。そう思うたら今から武者ぶるいともいうのやろかのう、何やらじっとしていられんで、まず加恵にいうて心を落着かせようかと、ここへやってきたんや」(華岡青洲の妻)

2.2.4. 精神活動動詞

「精神活動動詞」とは、人間の知的な働きを捉える動詞のことを言う。「精神活動動詞」は、精神活動の内容を表す名詞を対象にとっている。例えば、例(31)では「方程式」が、(32)では「未来」が精神活動の内容として現れている。

(31) 黄色い服を着た娘が言う。わたしも隠し芸がありませんので、方程式を解いて見せます。(エディプスの恋人)

(32) 君の国の青年を見せ給え、君の国の未来を占ってみせよう、と言った男がいるそうだ。(風に吹かれて)

2.2.5. 感情・心理動詞

「感情・心理動詞」とは、心の動きや状態など人間の内面を捉える動詞のことをいう。例えば、例(33)の「感心する」は心の動きを捉えており、例(34)、(35)の「苦しむ」、「(生活を)案じる」は心の状態を捉えている。

(33) 「やっぱり、あんたはたいしたもんやわ。うちなんか、所詮女やねんなァ。そこまで頭

が廻らへん」。そう令子が感心してみせるので、私はこれ一遍きりだと念を押しました。
(錦繡)

- (34) 都会人は軽薄だという。それは、苦悩を苦しんで見せることを、潔しとしないからだ。苦しみがないことはない。しかし、都会人はそれを何とかして、別の表現にすりかえようとする。(太郎物語・高校編)

- (35) 「きぬさんの方には、お父さんがきちんと困らないように心がけてるんですから、心配しなくてもいいのよ」母が折にふれていい、善衛はまたそういう母に、なお自分が心やさしい子供であることをみせたくて、甘える気持から、きぬの生活を案じてみせましたのだが、とり立てて気にもかからず、だから、むしろ三年前の身すばらしい自分とはうってかわった晴姿をほこりたく、服を新しくねだってきぬをたずねた。(焼土層)

2.2.6. 成就動詞

「成就動詞」とは、物事を成し遂げることを表す動詞のことをいう。例えば、例(36)の「成功する」は目標を達成することを、例(37)の「勝つ」は競い合った結果、相手より優位の立場に立つことを表している。

- (36) 「この地が駄目なら内地へ引き揚げたら如何です」「このままでは帰るわけにはいかない」志方にも男の意地があった。「今度こそきつと成功してみせる。」(花埋み)
- (37) 彼等には彼等の生き方があり、自分には自分の生き方がある。「おれは孤独に勝って見せる」加藤は震えながらそうつぶやいていた。(孤高の人)

2.2.7. 社会的な状態変化動詞

「社会的な状態変化動詞」とは、社会において占める身分や状態が変化することを捉える動詞のことをいう。例(38)、(39)の「日本一の細工師になる」、「おかみさんになる」は社会的身分の変化を表している。「社会的な状態変化動詞」は、動作の瞬間的な変化を捉えている点から「非可視動作」に入れる。

- (38) 〈そうや、芦原へいってみよう。わいも、嫁をもらわんならん。玉枝みたいな嫁がきてくれたら、わいもどないに嬉しいやろ。わいは一ぱい精出して、細工物をつくってみせる。日本一の細工師になってみせる……〉(越前竹人形)
- (39) 「どうしてあたしをおかみさんにしてくれなかったの」おのぶは涙のあふれ出るままの眼で栄二をみつめながら云った、「あたしがこんなにあんたが好きなのに、あたしならきつといいおかみさんになってみせたのに、賃仕事どころか、あんたのためならあたしは、よろこんで身売りだってしたのに」(さぶ)

2.2.8. 生理的な状態変化動詞

「生理的な状態変化動詞」とは、人間の体に生じる現象、および、それに関連する動作を捉える動詞のことをいう。例えば、例(40)の「生きる」、「老いる」、「病む」、「死ぬ」は、生老病死という、人間の体に生じる自然な現象を捉える動詞である。例(41)の「治る」は自然な現象である場合も、人為的な現象である場合もあるが、いずれにしても、人間の体に生じる現象を捉える動詞である。「生理的な状態変化動詞」は、瞬間的な変化や長期間にわたる変化を捉えている点から「非可視動詞」に入れる。

- (40) 祖父は僕たち遺族に、生きてみせ、老いてみせ、病んでみせ、死んでみせたのだ。と。
亡くなったのは父方の祖父。親父が祖父を見送るのを見ながら、僕にもいつか親父を見送る日が来るのだと考えていました。

(<http://blog.goo.ne.jp/bamboo-rat/e/82624d3b3ab85c023bc4412ea1c0fea3>)

- (47) 文句を言いながら吟子はきな臭い粉末を一気に呑み干すと、荻江の差し出す水を横になっただま受け取る。「絶対に治ってみせるわ」(花埋み)

2.3. 「してみせる」における語彙的特徴のまとめ

以上、「してみせる」の形をとる動詞を、視覚で捉えられるか否かを基準にし「可視動詞」と「非可視動詞」とに大きく分け、それぞれの動詞がどんな対象をとっているかでさらに詳しく分けて述べた。次の<表2>は、その内訳をまとめたものである。

<表2>の内容から、「してみせる」の形をとる動詞には視覚で捉えられない「非可視動詞」より、視覚で捉えられる「可視動詞」が極めて多く現れていることが分かる。このような特徴

表2 「してみせる」の形をとる動詞

可視動詞	数	%	非可視動詞	数	%
具体的な作用動詞	90	21.3	抽象的な作用動詞	28	6.6
再帰的な表情・身振り動詞	125	29.6	養育動詞	6	1.4
言語活動動詞	20	4.7	治療動詞	4	0.9
表現活動動詞	16	3.8	精神活動動詞	6	1.4
態度動詞	14	3.3	感情・心理動詞	10	2.4
表情・身振り動詞	50	11.8	成就動詞	7	1.7
移動動詞	12	2.8	社会的な状態変化動詞	4	0.9
姿勢変化動詞	7	1.7	生理的な状態変化動詞	3	0.7
その他	11	2.6	その他	10	2.4
可視動詞小計	345	81.6	非可視動詞小計	78	18.4

(合計: 423 例)

は、「してみせる」が本動詞「見せる」の文法化した形式であることを裏づけるものとして指摘できよう。すなわち、「してみせる」に「可視動詞」が多く現れていることは、本動詞「見せる」が「対象を示して見えるようにする」ことを表す動詞であることから予想されることであるが、それを今回の調査で確かめることができた。

以下では「可視動詞」と「非可視動詞」に分けてそれぞれの特徴について述べていく。

まず、「可視動詞」には、「再帰的な表情・身振り動詞」が125例（全体の29.6%）と最も多く現れ、その次に「具体的な作用動詞」、「表情・身振り動詞」の順に多く現れている。その他に、「言語活動動詞」、「表現活動動詞」のように動作を媒介して相手に表現内容を伝えることを表す動詞や「態度動詞」、「移動動詞」、「姿勢変化動詞」のように体の構え方を捉える動詞が多く見られる。

また、「再帰的な表情・身振り動詞」と「表情・身振り動詞」を合わせると、全体423例のうち192例（全体の45.4%）が顔つきや仕種を表す動詞である。

日常生活において表情や身振りが身体言語（Body Language）として意思疎通の役割を果たす場合があるのだが、「してみせる」の形をとる動詞に表情や身振りを表す動詞が多く現れるということは、「してみせる」が単に「動作そのものを示」しているのではなく、動作を通して相手に意思や感情を伝える機能的な面が大きいからであると思われる。

次に、「非可視動詞」には、「抽象的な作用動詞」が28例（全体の6.6%）と最も多く現れている。その他に、「精神活動動詞」、「感情・心理動詞」のように人間の内面を捉える動詞、「養育動詞」、「治療動詞」のように労力を要する複合的な動作を表す動詞、「成就動詞」、「社会的な状態変化動詞」、「生理的な状態変化動詞」のように瞬間的な変化や長期間にわたる変化を捉える動詞が現れている。それらの動詞は、動作そのものは視覚で捉えにくが、変化の結果を何らかの形で示すことができ、そのような特徴から「してみせる」の形をとりやすいと思われる。

3. 「してみせる」における形態・構文的特徴

まず、「してみせる」が文中でとっている語形をまとめると〈表3〉のようになる。

「してみせる」の意味と「してみせる」が文中でとっている語形との関わりについては、「すぎさらずの形で話し手のつよい意志を表す」（鈴木1969、笠松1991）という指摘にとどまっている。

本稿では、「してみせる」が文中でとっている語形を網羅的に調べるが、その際に、「してみせる」が文中で過去形をとっているか、それとも、非過去形をとっているかに注目して分類を行う。また、その他に、終止形、接続形という区別をすることによって、鈴木（1969）と笠松（1991）で指摘されている「すぎさらずの形」、すなわち、述語の文末の位置に現われている非過去形について正確に捉え、さらに、文末に現われている過去形についても考察することにする。

表3 「してみせる」が文中でとっている語形（合計: 423 例）

	過去形（例）	数	%	非過去形（例）	数	%
終 止 形 ¹²	(叙述形) してみせた ¹³ (188)	206	75.2	(叙述形) してみせる ¹⁴ (63)	78	52.3
				(意志・勧誘形) してみ せよう (9)	11	7.4
				(命令形) してみせてご らん (1)	1	0.7
接 続 形 ¹⁵	(順接接続形) してみせ たし (1)	40	14.6	(順接接続形) してみせ るし (1)	18	12.1
	(逆接接続形) してみせ たが (7)	12	4.4	(逆接接続形) してみせ るが (3)	5	3.4
	(条件形) してみせたら (2)	2	0.7	(条件形) してみせると (10)	11	7.4
	(連体形) してみせた N (12)	14	5.1	(連体形) してみせる N (21)	25	16.8
	過去形小計	274	100.0	非過去形小計	149	100.0

(合計: 423 例)

以下では、3.1.1 では「してみせる」がとっている様々な過去形について、3.1.2 では「してみせる」がとっている様々な非過去形について述べることにする。

3.1. 「してみせる」がとっている様々な過去形について

まず、〈表3〉の左側にまとめたのは、「してみせる」がとっている様々な過去形である。その内容から、「してみせる」がとっている様々な過去形には、「してみせた」、「してみせたりした」、「してみせたのである」のような叙述形（例（42））が206例（過去形全体の75.2%）と極めて多く現われていること、特に「してみせた」という形が188例（過去形の68.6%、全体の44.4%）と非常に多いことが分かる。接続形には、「指差してみせた方角」のような連体形（例（43））、「微笑をつくってみせたが」のような逆接接続形（例（44））などが現れている。

12 奥田（1993）は、『ひとえ文（単文）』あるいはいいきり文（主文）において、述語の位置にあらわれてくる動詞の、さまざまな文法的なかたちのセットを《終止形》とよぶとしている。本稿では、文末に現われる様々な形を「終止形」にまとめ、終止形以外の順接接続形、逆接接続形、条件形、連体形を「接続形」にまとめることにする。

13 「過去」の叙述形には、「してみせた」の他に、「してみせたのである」（6）、「してみせたりした」（4）、「してみせていた」（2）などが含まれている。加えて、「してみせました」のような丁寧形、「ね」、「ぞ」のような終助詞が付いているものも含む。それは、他の形の場合も同様である。

14 「非過去」の叙述形には、「してみせる」の他に、「してみせている」（2）、「してみせるのだ」（1）、「してみせるだろう」（1）などが含まれている。

15 接続形のうち、「してみせ」、「してみせて」、「してみせながら」のように時制の対立がないものについては、文末の時制を基準にして過去か非過去かを判断した。

- (42) 内藤は電車に乗り込み、「昨日のことは心配しないで、もう何でもないので」と言い、顔を皺だらけにして笑ってみせた。(一瞬の夏)
- (43) テイ子さんは可部へ行こうか戸坂へ行こうかと迷ったが、今さら迷っても仕様がないと気を取りなおして可部へ行くことにした。(略)あとは、ただ兵隊が指差して見せた方角へ向って行き、線路づたいに歩いていると僕を見つけたそうだ。(黒い雨)
- (44) その彼等を信徒だと錯覚して彼は、頬に無理矢理に微笑をつくってみせたが、一人として応えるものはいなかった。(沈黙)

「してみせる」の過去形に叙述形が多いことについて、過去形を述語とする文に、3人称主語の文が多いことが原因として考えられる。具体的には、過去形の「してみせる」を述語とする文では、3人称主語の文が217例(過去形全体の92.3%)と圧倒的に多く現れているのに対し、1人称、1・2人称主語の文、また、非人称主語の文は、少数である。

動作を見せる相手は、例(45)の「信夫に」のように「人に」のほかに「人に向かって」、「人の前に」、「人の前で」の形で示されることもあるが、多くの場合は、例(46)のように省略されている。

- (45) 「教えて下さいな」待子は吉川のひざをゆすった。吉川はきりっと結んだ唇に人さし指を当てて、信夫にうなずいてみせた。「ないしょだ。ないしょだ」(塩狩峠)
- (46) 七月の二十日に、四年の一学期の成績が発表になった。鮎太はいっきに三十番に落ちていた。「秀才もねえ！」と雪枝は溜息をついてみせた。「学問もだめ、鉄棒もだめ、歌もだめ」と言った。(あすなろ物語)

3.2. 「してみせる」がとっている様々な非過去形について

次に、〈表3〉の右側にまとめたのは、「してみせる」がとっている様々な非過去形である。その内容から、「してみせる」がとっている非過去形には、「してみせる」、「してみせるのだ」のような叙述形(例(47))が63例(非過去形全体の52.3%)と最も多く現れ、その他に、意志形(例(48))、命令形(例(49))も現われていることが分かる。接続形には、「酔っ払い以上のことをやってみせるし」のような順接接続形(例(50))、「逆立ちして見せる癖」のような連体形(例(51))など様々な形が現れている。

- (47) ライト・グリーンの服を着た娘が言う。わたしはこれしか隠し芸がないのです。泣く真似をやります。そして彼女は泣く真似をして見せる。手の甲を眼にあて、えーん、えーんと巧みに泣いて見せる。(エディプスの恋人)
- (48) この仔猫は六匹とも私ひとりで立派に育てあげてみせようと加恵は心で誓った。(華岡)

青洲の妻)

- (49) 「うまいものあった？」太郎は尋ねた。「塩鮭のアラを買って来たよ」「出してみせてごらん」と太郎は母親に命令し、ものを点検してから、「わりといいもんを買って来たね。(略)」と横柄な口調で言った。(太郎物語)
- (50) (山本は、筆者注) あんな剃刀みたいな人には仕えにくいだろうとよく言われたが、宴席などでは酒を飲まないのに酔っ払い以上のことをやってみせるし、仕えにくいという感じは少しも無かった。(山本五十六)
- (51) ついでに彼は、(略)とにかく逆立ちは得意で、何かというと、危険な場所で逆立ちして見せる癖があった。(山本五十六)

「してみせる」が文中でとっている語形が過去形の場合は、叙述形、特に「してみせた」の形に集中していることに比べ、非過去形の場合は、意志・勧誘形や命令形のようなモーダル形式が現れていることが特徴と言える。

また、非過去形の場合、叙述形で意志・決意の意味を表しているものが多いことが特徴と言える¹⁶。次の例を見てみよう。

- (52) 私は今日、立派にやりましたと、司祭は子供のように得意がってみせる。拍子木の音が中庭できこえた。(沈黙)
- (53) 彼等には彼等の生き方があり、自分には自分の生き方がある。「おれは孤独に勝って見せる」加藤は震えながらそうつぶやいていた。(孤高の人)

上の例(52)、(53)には、両方とも「してみせる」という非過去の叙述形が使われているが、前者は「司祭」という3人称の人を主語とする平叙文であり、後者は「おれ」という1人称の人を主語とする意志文である。実際にコーパスに現れている例を調べた結果から、例(48)のような意志形由来の意志文の場合、独白や心中文のなかに使われることが多く、(53)のような叙述形由来の意志文の場合、会話文に使われることが多いことが傾向と言える。

最後に、「してみせる」が非過去形をとっている文のうち、意志文の場合は、動作を見せる相手が現れないことが多いことが特徴と言える。

4. 「してみせる」の意味・用法

「してみせる」の意味・用法は、第2節と第3節で見た「してみせる」における語彙・文法的特徴を手がかりにして、「動作の提示」(4.1.)、「動作の具体化」(4.2.)、「結果の提示」(4.3.)、

16 叙述形で意志・決意の意味を表しているものは、非過去の叙述形78例のうち46例(59%)を占めており、叙述形で述べ立てるものより多く現れている。

「話者の心理状態の提示」(4.4.)という4つに分けられる。

4.1. 動作の提示

「動作の提示」とは、「してみせる」の形をとる動詞が表す動作を相手に示すことを表す。

以下では、相手にどのような動作を示しているかに注目し、「表情や身振り・手振りの提示」(4.1.1.)と「行為の提示」(4.1.2.)に分けて述べることにする。

4.1.1. 表情や身振り・手振りの提示

「表情や身振り・手振りの提示」は、顔つきや仕種を相手に示すことを表す。

「再帰的な表情・身振り動詞」, 「表情・身振り動詞」の「可視動詞」が「してみせる」の形をとっている場合、3人称主語の文の際には「してみせる」が文中でとる形が過去形か非過去形に関わらず「表情や身振り・手振りの提示」の意味になり、1人称主語の文の際には過去形をとっているときのみ「表情や身振り・手振りの提示」の意味になる。

「表情や身振り・手振りの提示」は、単に顔つきや仕種そのものを示すことが目的であるというより、それを通じて感情や意思を相手に伝える点に注目したい。

(54) 井村誠一は、寝不足の腫れぼったい顔で、椅子に坐っていた。

「どうしたんだ」

井村は黙って苦笑してみせた。(砂の上の植物群)

(55) 伸子は手近な角をヒョイと曲がった。足音が近付いて来て、待ち構えていた伸子の前に、男が現れた。「ちょっと！」伸子は精一杯の怖い目つきをして見せた。「どうして私の後を尾けるんですか？」(女社長に乾杯！)

(56) 外国兵がゆっくり音節をくぎって言葉をくりかえしたが、僕は耳へ内側から血がたぎってくる音しか聞くことができない。僕は頭を振ってみせた。外国兵が苛立って硬すぎるほど明確な発音を再びくりかえし、僕は言葉の意味を理解して急激な恐怖に内臓を揺さぶられた。(人間の羊)

(57) 菅原村には、以前夏来たときに泊った家があった。彼はその家についたとき、水を飲む格好をして見せた。(中略)加藤は濡れたものを脱がされ、囲炉裏端に坐らされた。熱い粥が与えられた。(孤高の人)

(58) 「適当な時に起して下さいね」美幸が言うと、藤原はわかったというふうに手をあげてみせた。(太郎物語・大学編)

上に挙げたのは、表情を表す動詞(例(54), (55)), 身振りを表す動詞(例(56), (57)), また、手振りを表す動詞(例(58))が「してみせる」の形をとっている例である。

ここで表情や身振り・手振りで伝えようとする動作主の感情や意思に注目すると、例(54)

では「苦笑する」動作を示し、「どうしたんだ」という質問に対する答えをしている。(55)では「怖い目つきをする」動作を示すことで、不愉快な感情や警戒の気持ちを相手に伝えている。

そして、例(56)では、「頭をふる」動作を示すことで「聞こえない」ということを相手に伝えている。例(57)では「水を飲む格好」を示し、水を頼んでいる。また、例(58)では、「手をあげる」動作を示し、相手の依頼に対して「了解」の意を伝えている。

4.1.2. 行為の提示

「行為の提示」は、視覚で捉えられる人間の行為を相手に示すことを表す。ただし、顔つきや仕種はここから除く。それは、顔つきや仕種が単独の動作として成り立つというより、感情や意思の伝達的手段として使われることが多いため、行為とは性質を異にするとと思われるからである。

「具体的な作用動詞」、「姿勢変化動詞」、「表現活動動詞」、「言語活動動詞」、「移動動詞」の「可視動詞」が「してみせる」の形をとっている場合、2人称、3人称主語の文の際には「してみせる」が文中でとる形が過去形か非過去形かに関わらず「行為の提示」の意味になり、1人称主語の際には過去形をとっているときのみ、「行為の提示」の意味になる。

- (59) 鮫島は、一本の檣の棒が土間につきさされていて、その棒の上部が一寸ばかりの大きさで四角くえぐられているのをみた。何に使うものかわからない。首をかしげていると、喜助は足もとの竹をひろってそのえぐれた穴にさしこみ、握った手に力を入れて、ぐいっと下方へ押してみせた。すると、青竹は弓状になった。(越前竹人形)
- (60) 下北沢の改札口で切符を買おうとすると、「俺は定期なんだ」と内藤は言って、尻のポケットから紐のついた定期入れを出して見せた。(一瞬の夏)
- (61) 「減らしたみたいだな」私が言うと、内藤はゆるくなった指輪を回して見せた。「この回り具合なら、七十二・五キロくらいかな。たぶん、リミットを切ってるよ」「すごいじゃないか」(一瞬の夏)

上に挙げたのは、接触行為(例(59))、着脱行為(例(60))、対象変化(例(61))を表す「具体的な作用動詞」が「してみせる」の形をとっている例である。これらの動詞は、「してみせる」の形になると、意図的に相手に示すことで相手の反応を意識して行うという側面がより強く感じられる。例えば、例(59)では「竹を下方へ押す」動作を示し、竹人形を作る過程の一部をわざと実演している。例(60)では、ポケットから定期入れを出して、自分が定期の所持者であることをアピールしている。例(61)では「指輪を回す」動作を示し、体重を減らしたことを証明している。

- (62) 「やあ、小母さん来てたの」と、山本は出されている林檎を、手を使わずにナイフとフ

ォークだけでむく芸当などして見せて、それから着更えに別室へ立って行くが、礼子は知らん顔をしている。(山本五十六)

(63) アメリカ史については詳しいだろうと思うとそうでもなく、私が一九〇〇年から現在までの大統領の名前を受験時代の記憶を辿って言ってみせたら、誰もが舌を巻いていた。(若き数学者のアメリカ)

(64) 「あんた、ものすごく醜怪だよ」とぼくはいった。するとエスキモーは両腕をさしあげてフランケンシュタインのようにぎごちなく歩いてみせた。(聖少女)

上に挙げたのは、「表現活動動詞」(例 (68))、「言語活動動詞」(例 (69))、「移動動詞」(例 (70))が「してみせる」の形をとっている例である。例 (68) では、「芸当する」動作を示し、「小母さん」を楽しませることを意識して行っている。例 (69) では、「言う」という言語活動をし、誇ることを意識して行うという意味が感じられる。例 (70) では、「歩く」という動作を示し、相手の「醜怪だ」という発言に対して反応している。

4.2. 動作の具体化

「動作の具体化」は、感情・心理のような人の内面や抽象的な事柄、態度などを具体化して示すことを表す。

「感情・心理動詞」、「精神活動動詞」のような人間の内面を捉える動詞や「抽象的な作用動詞」、「養育動詞」、「治療動詞」のような「非可視動詞」が「してみせる」の形をとっている場合、3人称主語の文の際には「してみせる」が文中でとっている形が過去形か非過去形かに関わらず「動作の具体化」の意味になり、1人称主語の文の際には過去形をとっているときのみの「動作の具体化」の意味になる。また、「態度動詞」は語彙的な意味のなかに具体的な動作が定められていないが、「してみせる」の形になると動作として具体化されていることを積極的に示す。

「動作の具体化」に関連する「してみせる」の先行研究として、成田(1981)の次のような指摘がある。成田は、次の例(65)を挙げ、それについて「aでは『驚いた』ことを示す身ぶり・表情が伴われているか、あるいはbと同様にことばで表現されているか、いずれにしても当人以外の人がそう『みせる』ための手がかりがなければならない。」(成田 1981: 72)と述べている。

(71) a 驚いてみせた。

b 想像してみせた。

【成田(1981: 72)の例(25)】

成田(1981)は、「してみせる」が表す意味として挙げている意味のうち「不特定多数のあるいは全ての人に対して示す」ものの場合、[+視覚性]を失っており、『みせる』ための手

がかり」が必要であることを指摘している¹⁷。

以下では、成田（1981）での考察を踏まえ、「動作の具体化」の意味の記述にあたって、『みせる』手がかり」に注目しながら述べていく。

- (66) 「こいつの好物はね、芋羊羹なんですよ。それさえあれば、御飯なんかなくても平気」
内藤は眼に笑いを含ませて言った。私もその冗談に乗り、大仰に驚いてみせた。「へえ、
ほんと。肉も魚も駄目だと言うから、何を食べているかと思えば、芋羊羹だったのか」
(一瞬の夏)
- (67) 「やっぱり、あんたはたいしたもんやわ。うちなんか、所詮女やねんなァ。そこまで頭
が廻らへん」。そう令子が感心してみせるので、私はこれ一遍きりだと念を押しまし
た。(錦繡)

上に挙げたのは、「驚く」、「感心する」のように、心の動きを捉えている感情・心理動詞が「してみせる」の形をとっている例である。それらの動詞が表す動作は、人の内面のことであるため、実際に動作として表れない場合もある。また、表れるとしても個人差があるので、特定の動作として示すことは難しい。しかし、例（72）のように「へえ、ほんと。」という言葉で驚いたことを具体的に示し、相手に積極的に伝えることができる。例（73）でも「やっぱり、あんたはたいしたもんやわ。」と言い、感心したことを具体的に示している。

- (68) しかし徹吉が帰ってしまったあと、千代子はいささか意地のわるい好奇心をむきだしにして、あれこれとさきほど見た峻一の——彼女のもっとも苦手とする龍子、つまりお中さまの長男の便りを分析してみせた。「およそ峻一さんらしくない手紙ね。……いよいよ武運に恵まれ……銃後の皆様の御期待に背かぬ……あれはきっと検閲があるからでしょうね。(省略)」(楡家の人びと)
- (69) こうして日本海軍が、戦艦に対する飛行機の優越を、三度にわたって世界に実証してみせてから間もなく、十二月二十一日の正午、山本が五年前、その建造に極力反対した戦艦「大和」が、初めて柱島泊地に、完成した姿をあらわした。(山本五十六)

上の例で「分析する」が表す動作は、頭の中で行われる精神的な活動であるため、具体的な動作として相手に示すことは難しい。しかし、例（68）では「お中さまの長男の便りを分析したことが」、「およそ峻一さんらしくない手紙ね。……いよいよ武運に恵まれ……銃後の皆様の御期待に背かぬ……あれはきっと検閲があるからでしょうね。(省略)」という発言で具体化さ

17 しかし、成田（1981）は、実際にどのような動詞が『みせる』ための手がかり」を必要とするかについては具体的に述べていない。

れている。例（69）では 文脈の中に「飛行機の優越」が海戦での勝利で具体化されている。

（70）「茹でたら半分に切って、スプーンで食べたら一番簡単よ」「僕、そんな単純なことしません」太郎は 威張って見せた。「僕、栗きんとんを作るか、さもないと、栗ご飯を炊きます」（太郎物語・大学編）

（71）追って来る気配に、岡みどりは振り向きざま、バッグで相手の顔のあたりを思い切り打った。「ウッ！」と相手が呻く、命中したらしい。「ふざけんじゃないよ！」言い捨てて走り出す。——強がって見せたものの、やはり怖いのである。（女社長に乾杯！）

上に挙げたのは、「威張る」、「強がる」のような態度を表す動詞が「してみせる」の形をとっている例である。「態度動詞」の場合、人の内面を反映しており、それが具体的にどのような動作であるか特定の動作として定めることは難しい。しかし、それらの動詞が「してみせる」になると何らかの動作として具体化されることを示す。例えば、例（70）、（71）では、それぞれ「僕、そんな単純なことしません」、「ふざけんじゃないよ！」という発言で威張っていること、強がっていることが具体化されている。

4. 3. 結果の提示

「結果の提示」とは、主体や事態が変化した結果を相手に示すことを表す。「社会的状態変化動詞」、「成就動詞」の「非可視動詞」が「してみせる」の形をとっている場合「してみせる」が文中で過去形をとると「結果の提示」の意味になる。

（72）（内藤は、筆者注）天才でもなければ、そんな短期間に、スイッチしたスタイルを自分のものにすることなどできはしない。だが、この急造サウスポーは難なくそのスタイルを身につけ、あっさりと優勝してみせたのである。（一瞬の夏）

（73）「あたしがこんなにあんたが好きなのに、あたしならきっといいおかみさんになってみせたのに、賃仕事どころか、あんたのためならあたしは、よろこんで身売りだってしたのに」（さぶ）

例（72）の「優勝する」は、瞬間的な事態の変化を捉える「非可視動詞」であり、例（73）の「いいおかみさんになる」も社会的な状態変化という変化の瞬間的な側面を捉える「非可視動詞」である。しかし、これらの動詞が「してみせる」の形になると、例（72）では優勝したことが結果として相手に示され、例（73）では「いいおかみさんにな」った姿が結果として相手に示されただろうということを表している。

4. 4. 話者の心理状態の提示

「話者の心理状態の提示」とは、話し手の動作や事柄を実現させようとする決意、信念、自信感といった心理状態を示すことを表す。

「してみせる」が終止形の非過去形をとり、「してみせる」を述語とする文の主語が1人称の話し手である場合、「話者の心理状態の提示」の意味になる。それは、「話者の心理状態の提示」で表される話し手の決意、信念、自信感という心理状態が、話し手自身にしか分からない領域であるためであると思われる。「可視動詞」、「非可視動詞」という動詞の制約はない。

- (74) 「おいおい、与太をとばすのはやめろ！ そんなことができるものか」「できたらどうしますか？」「逆立ちしてこのへんを歩いてみせる。」(ブンとフン)
- (74) 加藤の眼が光った。意地悪をするならしてみるがいい。おれは、雄山の頂上まで、きっと登ってみせる。(孤高の人)
- (75) <(前略) わいは一ぱい精出して、細工物をつくってみせる。日本一の細工師になってみせる……> (越前竹人形)
- (76) エジソンは現在もなお、蓄音機や電池の改良に専心していることを語り、(省略) ゴムはアメリカ国内で産出せず、その供給の不安定を解決するため、同じ性質を持つ、ゴムにかわる物質を発見してみせるつもりだとしゃべった。そして、こうつけくわえた。(人民は弱し官吏は強し)

上の例の「してみせる」がとっている語形は全て、「してみせる」、「してみせるつもりだ」、「してみせよう」のような終止形の非過去形である。

「してみせる」を述語とする文の主語は、1人称の話し手である。それは、例(75)、(76)の「おれは」、「わいは」のように文中に現れることもあるが、例(74)のように現れないこともある。また、例(77)の主語は、「エジソン」という3人称であるが、それは、「～としゃべる」という引用文に含まれているためであり、実質的な主語は1人称の話者であることは言うまでもない。

動作や事柄の実現を見せる相手は、文中に現れていないことが多い。それは、「話者の心理状態の提示」が動作や事柄の実現を世の中に証明し、認めてもらおうとする決意、信念、自信感を示すものであり、誰か特定の人を意識して示す動作ではないからであると思われる。

ちなみに、例(74)、(75)が「歩く」、「登る」という「可視動詞」の例であり、例(76)、(77)が「細工師になる」、「物質を発見する」という「非可視動詞」の例である。このように、「話者の心理状態の提示」では「可視動詞」であるか「非可視動詞」であるかは意味と直接関わりを持たず、「してみせる」が文中でとっている語形および主語の人称などが重要である。

- (78) 文句を言いながら吟子はきな臭い粉末を一気に呑み干すと、荻江の差し出す水を横に

なっただま受け取る。「絶対に治ってみせるわ」(花埋み)

- (79) あの父のことですごくから、もうそろそろ、何か自分の意見を、一見穏やかに、そのじつ断じて言うことをきかせてみせるといった目つきで、じわじわと投げかけてくる頃ではないかという予感がいたしました。(錦繡)

また、話し手の動作の実現へと向う積極的な心構えは、上の例(86)、(87)の「絶対に」、「断じて」のように、共起している副詞にも反映されている。その他に「必ず」、「きっと」、「なんとか」、「なんとかしてでも」などが現れている。

4.5. 「してみせる」の意味・用法のまとめ

以上、「してみせる」の意味・用法について、①「動作の提示」(「表情や身振り・手振りの提示」、「行為の提示」)、②「動作の具体化」、③「結果の提示」、④「話者の心理状態の提示」という4つに分けて述べた。それを簡単にまとめると次のようになる。

- ①「動作の提示」は、「してみせる」の形をとる動詞が表す動作を相手に示すことを表す。「動作の提示」は相手にどのような動作を示しているかに注目し、「表情や身振り・手振りの提示」、「行為の提示」に分けて述べた。「表情や身振り・手振りの提示」は、顔つきや仕種を相手に示すことを表し、「行為の提示」は、視覚で捉えられる人間の行為を相手に示すことを表す。
- ②「動作の具体化」は、感情・心理のような人の内面や精神活動、抽象的な事柄を、態度などを具体化して示すことを表す。
- ③「結果の提示」とは、主体や事態が変化した結果を相手に示すことを表す。
- ④「話者の心理状態の提示」は、話し手の動作や事柄を実現させようとする決意、信念、自信感といった心理状態を示すことを表す。

5. おわりに

本稿では、視覚性の観点から、「してみせる」における語彙・文法的特徴を明らかにし、それを手がかりにして、「してみせる」の意味・用法を、①「動作の提示」(「表情や身振り・手振りの提示」、「行為の提示」)、②「動作の具体化」、③「結果の提示」、④「話者の心理状態の提示」という4つに分けて述べた。

「してみせる」の形をとっている動詞が「可視動詞」である場合は「動作の提示」を表し、「非可視動詞」である場合は「動作の具体化」、「結果の提示」を表すことが多いことが傾向として言える。また、「可視動詞」のうち「態度動詞」は、語彙的な意味のなかにどのような動作を示しているかが定められていないが、「してみせる」の形になり、動作として具体化されていることを示すことを明らかにした。

以上見てきたように、「してみせる」の形をとっている動詞が「可視動詞」であるか、「非可

視動詞」であるかは「してみせる」の意味に大きく関わっていると思われる。しかし、「話者の心理状態の提示」と「結果の提示」の区別など「視覚性」の観点からの考察ではまだ多くの問題が残されている。それについては、今後継続して考察を深めていきたい。

引用文献

- 奥田靖雄（1968～1972）「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」、『教育国語』12, 13, 15, 20, 21, 23, 25, 26, 28, むぎ書房。（言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』: 21-149, むぎ書房に所収。本稿ではこの本を参考にした）
- （1993）「動詞の終止形（その1）」、『教育国語』2・9: 44-53, むぎ書房。
- 笠松郁子（1991）「「してみせる」を述語にする文」、『教育国語』100: 38-51, むぎ書房。
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編（1996）『言語学大辞典』第6巻 術語編, 三省堂。
- 鈴木重幸（1969）「日本語文法・形態論（5）—『にっぽんご4の上』解説—」、『教育国語』16: 83-99, むぎ書房。
- （1972）『日本語文法・形態論』, むぎ書房。
- 成知炫（近刊）『「してみせる」における語彙の特徴について—視覚性の観点から—』, 『日語教育』第47輯, 韓国日本語教育学会。
- 高橋太郎（1969）「すがたともくろみ」, 教育科学研究会文法講座テキスト（金田一春彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』: 117-153, むぎ書房に所収。本稿ではこの本を参照）
- 成田徹男（1981）「補助動詞と本動詞—「みる」「みせる」を例に—」, 『島田勇雄先生古稀記念 ことばの論文集』: 590-572, 明治書院。（横書きのページ59-77。本稿での引用ページは横書きを参考にしている）
- 明星学園・国語部（1968）『にっぽんご4の上』, むぎ書房。
- 村木新次郎（1991）「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」, 『日本語のヴォイスと他動性』（仁田義雄編）: 1-30, くろしお出版。
- 森田良行（1977）『基礎日本語—意味と使い方』, 角川書店。

用例の出典

新潮社（1995）『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』

[付記] 本稿は、平成20年度科学研究費補助金（特別研究奨励費）による研究成果の一部である。